

そうだ、猫に聞いてみよう No. 2



小池 英梨子

前回のおさらい

前回の連載では、猫流の「問題の本質の捉え方」を書かせていただきました。
おさらいすると・・・

☆問題の本質を立体的に捉えるポイント☆

- ① 悪者探しをしない
- ② 3つの視点で捉える
 - ・ミクロな視点で見えているものを理解する
 - ・メゾな視点で全体図を捉える
 - ・マクロな視点で、社会システムの中で捉えなおす
- ③ 背後ストーリーを理解する

以上3点のステップが猫流問題の捉え方でした。その中でも「①悪者探しをしない」をメインに書きました。

今回は、「②3つの視点で捉える」をメインに書いていきます。自分はどの視点で、見て考えているのか把握した上で、他者はどの視点で、見て、考え、主張しているのか、理解することが問題の本質を捉える上でとっても大切です。ここがあやふやだと、主張が永遠にかみ合わないまま、時間だけが過ぎていってしまいます(連載No1. おじいさんとおばあさんの例参照)。また、ミクロ、メゾ、マクロ、3つの視点を獲得していくことで、活動内容がどう変化していくのか、立命館大学猫の会の事例を紹介しながら解説していきたいと思えます。また、猫との関わりを通して生まれる学生の心理的な変化にも焦点を当て、大学猫活動の教育的意義にも触れられたらいいなと思っています。

大学猫活動ってそもそもなんだ？という方がほとんどだと思いますので、まずは、立命館大学猫の会について、紹介したいと思います。しばらくは、3つの視点の話というよりも活動紹介になってしまいますが、それはそれで興味深いものだと思うのでよろしければお付き合いください。

1. 「RitsCatの大学猫活動」紹介

現在の活動内容を具体的にまとめると、

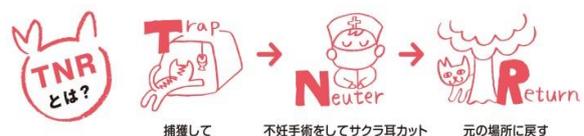
- ①大学内の猫に不妊去勢手術 (TNR) の実施
- ②毎朝毎夕の餌やり
- ③猫のトイレ掃除
- ④猫の健康管理
- ⑤適切な猫との関わりでの啓発活動

といった内容である。

ここからは、それぞれの活動内容を説明していきます。

①大学内の猫に不妊去勢手術 (TNR) の実施

大学構内に住み着いた猫を捕獲し、不妊去勢手術を施しその印に耳さきをV字にカットし、再び構内に戻すこと。この取り組みは、「TNR (ティーン・エヌ・アール)」や「さくらねこ TNR」と呼ばれる。何の略かという、「Trap (捕獲)」「Neuter (不妊手術)」「Return (元の場所に戻す)」のことで、何故英語なのかという、日本で始まったオリジナルの取り組みではなく、世界的な取り組みだということである。



©公益財団法人どうぶつ基金

実際に、「TNR と CAT」などで検索すると多くの海外論文や web サイトがヒットする。ただし、日本で主に実施されている TNR はノラ猫の迷惑行為が人の生活に及ぼす影響や殺処分数を抑える目的で実施されているケースがほとんどだが、海外では、希少動物を猫が捕食してしまう問題に対する対策として実施されているケースが多い。中心となる問題と目的が異なるため、海外の事例と日本の事例を同じ TNR だからと並べて考えるのは少し注意が必要だ。話がそれてしまったので、戻すと、TNR の目的はこれ以上の繁殖と、発情期特有の人にとって迷惑とされやすい鳴き声やマーキング行動の抑制を行うことが目的である。

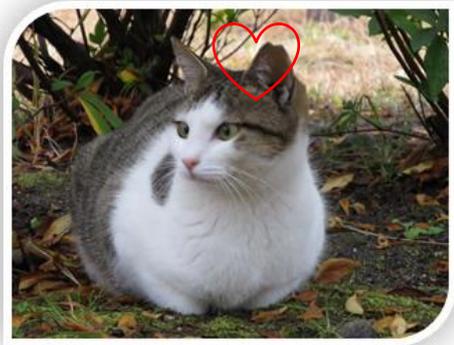


甘えん坊の食いしん坊「ぐり」

不妊去勢手術済みの印としてV字に耳先をカットする方法が一番メジャーなため、RitsCat でも採用している。V字のさくらカット他に、ストレートカットや、刺青を行う地域もある。RitsCat の初期の頃に不妊手術をした子はアニーのようにストレートカットの子もいる。



気分屋アイドル「アニー」



美しい猫マル

②毎朝毎夕の餌やり

不妊去勢手術を施し、一代限りとなった命を大切にするため、毎朝毎夕に餌やりを行う。この餌やりには、命を大切にすることを目的の他に、ゴミ漁りの防止や、定時に餌やりを行うことで新参者にいち早く気づくこと、捕獲を容易にする目的の餌付けも含まれる。



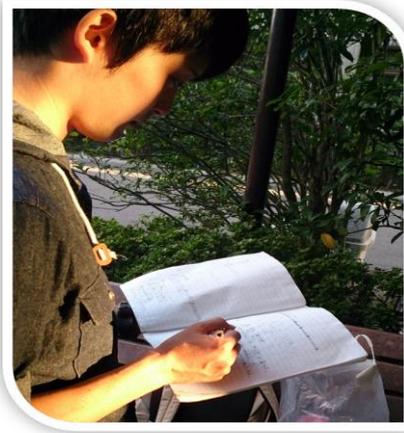
③猫のトイレ掃除

夕方の餌やりは一時間ほどかけて行われるが、その際に猫のトイレスポットの清掃を行う。具体的には糞尿を取り、消臭スプレーをする。これにより、猫の糞尿の臭いを軽減させ、猫に嫌悪感を抱く人を減少させることができる。



④猫の健康管理

毎日の餌やり時に、どの猫が食べに来ているか、変わった様子はないかといった健康管理を行う。体調が悪い猫がいる場合は、写真や動画を撮り掛かりつけの獣医さんに相談する。場合によっては捕獲し通院する。猫の健康状態が良いことは、キャンパス衛生にも少なからず良い影響がある。



餌やりセット



⑤適切な猫との関わりの啓発活動

「人の食べ物を与えない」といった餌やりに対する啓発看板の設置や、日本の猫の殺処分の現状と、地域猫活動や大学猫活動といった取り組みの有効性と可能性の普及啓発活動を学内外に向け行っている。

啓発ポスターのひとつ



活動内容はざっと以上の内容だ。補足すると、医療費は、学校からは出ておらず、学生の会費と、サークルの活動を知った方からのご寄付で成り立っている。現在は、不妊手術対象の猫も新参者が入ってこない限りいない上に、会員数が多いので、積極的な寄付の呼びかけは行っていない。

2. 活動の成り立ちを3つの視点から読み解く

上記のような活動内容を確立するまでに、どのように、ミクロ、メゾ、マクロ、3つの視点を獲得し、活動内容を変化させていったのか、記述していきたい。

2-1. はじまり (ミクロな視点の理解)

立命館大学猫の会 (以下 RitsCat) は 2010 年に発足 (正式設立は 2011 年) し、立命館大学衣笠キャンパス内の猫の世話や管理を行っている。2015 年現在は会員が 100 名を超える人気サークルの一つだ。

2010 年、立命館大学衣笠キャンパスには 15 頭ほどの猫が生息していた。地域の特徴としては、閑静な住宅街と山に囲まれたキャンパスで、猫好きの学生や職員がそれぞれ餌をあげたりと思いに可愛がっていた。そんな平穏な日々の中、突然設置された餌やり禁止看板――――。



問題となった餌やり禁止看板

これに対し、「なんで猫に餌やったらあかんねん！」と疑問と反感を抱いた学生(後の RitsCat 初代代表の T さん。以下 T さん)は、大学事務局

に事情を聞きに行くが、相手にしてもらえず説明が得られなかった。しかし、Tさんは諦めず、質問状を作成して提出し、大学事務局との対話の道を開いた。

この段階は、第1の“ミクロな視点で見えているものを理解する”前の段階である。ここから、大学事務局との対話の道を開いた学生は、近隣住民から猫の苦情が寄せられていること、大学事務局としては苦情に対応しないわけにはいかず、仕方なく看板を設置したことを知る。それによって、自分の視点で見えていた猫の愛くるしい状態は、あくまで自分のミクロな視点であり、別のミクロな視点では、近隣でトイレや喧嘩をする迷惑な猫という見え方もあるのだと知る。自分の視点の認知と他者の視点の認知。これが、問題の本質を捉えるための、3つの視点の第1段階「ミクロな視点で見えているものを理解する」である。

2-2.提案（メゾな視点の獲得）

その頃学内では猫の殺処分に大学が動くのではないかと噂が広がり、初代表のTさんは猫を殺されたくないという思いから大学側との対話を繰り返した。様々な価値観を持つ学生が生活し、近隣住民と接している大学の立場としては、猫の世話をするような対策には踏み切れないと感じ取る。そして、Tさんと同じように猫を可愛がっていた職員さんのアドバイスも受けながら、悩んだ末に不妊去勢手術を学生がやると提案する。そして、不妊去勢手術を実施するためには、猫の個体把握が必要であり、捕獲のために人にある程度慣らす必要があること、つまり餌やりを行う必要があることを根気強く説明した。そして、大学側も猫を減らすための活動であるという前提を確認したうえで、餌やりを容認していった。

この段階で、Tさんは、感情に任せ反対するのではなく、第2の“メゾな視点”で全体図を捉えた。そして悩み模索した結果、「不妊去勢手術を行う、その代わり餌やりの許可をもらう」という落

とどころを見出した（両者の妥協点ではなく、両者 Win-Win の取り組みなので、超越点と表現したいくらいだが、この段階ではTさんの視点はミクロとメゾ視点に留まっており、殺処分の現状や大学猫の出産問題を踏まえての不妊去勢手術決定ではない状態なので、あえて落とすところと表現する）。当初を振り返りTさんは「はじめはこんな活動をするつもりではなかった。ただ、猫を可愛がりたいだけだったのに。」と、当時を振り返る。

今回の連載の趣旨からズレてしまうので、割愛するが、いくら理にかなった活動であっても、前例の少ない状態で、それを理解してもらうのは、並大抵の事ではない。時には心無い言葉を受けながらも強い責任感でサークル発足につなげたTさんの努力を強調したい。

2-3.充実化（マクロな視点の獲得）

捕獲と不妊去勢手術は少しずつ進んでいったが、2年間ほど置き餌を行い、トイレ掃除の週1回程度と、衛生管理は十分とは言えなかった。三代目の代表に変わった年に、活動の改革期が訪れた。日本で行われている猫の殺処分の現状と、その打開策としての地域猫活動の先事例があることを勉強し、自分たちの活動の未熟さを知る。それと同時に、自分たちの活動の社会的意義に気づき、活動内容の精緻化を進めていった。また、活動内容を充実させるためには、もっと人数が必要であったため、勧誘活動を頑張り、15名程度の人数であったRitsCatに50人の新入生を集めた。本当の意味でキャンパス衛生に貢献するためにトイレ掃除を毎日実施し、不妊手術も徹底するようになった。餌も起き餌を止め、朝夕2回に増やし、土日も行ふことになった。HPだけでなく、Twitter、FacebookでRitsCatのアカウントを作成し、人の食べ物に猫に与えないよう啓発活動にも力を入れ始めた。

第3の「マクロな視点」の獲得が活動変革期の大きな原動力だといえるだろう。社会の中で自分

たちの活動を捉え直したことにより、自分たちの活動を成功させ、それを社会に発信することで、同じように困っている地域の人や猫を助けることに繋がり、ひいては猫の殺処分減少に影響を与えることができる可能性を有しているのだと、社会的意義や可能性を認識した。大学構内にいる猫を守りたいという視点では、トイレ掃除や不妊去勢手術は餌やりを許可してもらうために気持ち程度実施するだけでも良かった。しかし、日本中の猫を守りたいというマクロな視点を獲得したことにより、活動に新たなモチベーションが加わった。それが活動変革期の大きな動力となったと考えられる。



同志社大学と京都大学との合同勉強会で活動報告

このように、行動の変化には必ず視点の変化が伴っている。つまり、3つの視点を獲得していくことにより、自身の活動の欠けている部分や、持っている可能性に気づくことができるのだと考えられる。

3. なぜ3つの視点で考えることが重要だと思うのか。

なぜ3つの視点で考えることが重要だと思うのか、それにはもう一つ大きな理由がある。それは、「負のパターナリズム」を極力防ぐことに繋がるからだ。

パターナリズムとは、「干渉される人の為に干渉する」行為であるとされている(澤登, 1997)。(ここでは、「干渉される猫の為に干渉する」と

言い換える場合もあるが) 自分の利益に関係なく当事者(当事猫)にとって最善の方法を当事者(猫)に変わって選んだり、勧めたりすることで、医療や福祉の現場でよく出てくる言葉だ。きちんと機能する場合は決して悪いことではない。しかし、一方で相手に十分な情報・判断材料・機会を与えずに、相手のためと言いながらも、当事者の真の利益より、実は自分にとって利益になる方法を選んでしまう、“負の機能”も有している。

大学猫の活動は、猫の意思を確認することが出来ない以上、全てパターナリズムだといっても過言ではないだろう。だからこそ、猫の為と言いながら自分よがりの行動になっていないか、考え、問い続けることが必要なのだと思う。

一つの視点に偏っている時に、負のパターナリズムは発生しやすい。負のパターナリズムの厄介なところは、「あなたのために」と、相手のことを思っていると自分自身も思いこみながら、弱者の支援という名のもとに、強者利益の決定を行ってしまうことだ。特に、強烈な正義感に裏打ちされている場合は注意が必要だと思う。盲目的正義感は攻撃性になりやすい。ちょっと話がそれるが、ラブソングで「世界中を敵に回しても僕は君を守る」といったような歌がよくあるが、そういった曲を聞く度に、違和感を覚える。はたして、世界中を敵に回す以外に“君”を守る方法はないのだろうか。「僕だけを見ていて欲しい。僕だけを信用してほしい」という独占欲のような自己利益の感情に裏打ちされているのではないだろうか。あるいは、世界中と仲良くするためには、コミュニケーション能力や、自分が好きな人のこと以外に大事にしなきゃいけない社会的責任など、大変なことが多いけど、世界中を敵に回して守るのであれば、武力とか有無を言わずねじ伏せる力さえあれば可能だ。それって、自分の怠慢を「君を守る」というかっこいい正義感あふれる言葉で隠してないだろうか? 「君を守らなくていい」世界を、つまり守る必要がないくらい平和な世界を作る努

力をした方が、“君”の利益は大きいのではないだろうか。…なんて書くと夢いっぱいラブソングにケチ付けるなど怒られてしまいそうだ。でも、“僕”が自分の視点から見えている「敵」たちを、“君”の視点に立って見直してみたらそれは、「敵」ではないかもしれない…。

こんなエピソードがある。大学院生の時に教授から「猫にインタビューしてきなさい」と課題を出されたことがあった。んー、と思いながらも、大学猫たちのたまり場のベンチに座り、パソコンを開いてインタビューをした。もちろん自問自答だが、その時の文を抜粋して紹介する。

筆者「嫌いな人ってどんな人？」

アニー「近寄ってきてうるさい人かな。」

筆者「そっか、猫が嫌いな人は寄ってこないから、アニーが迷惑なのはむしろ凶々しい猫好きなのか。」

自分で答えているはずなのに意外な気づきを得たと灰色マークをしていた。この頃の筆者は猫嫌いの人からどうやって猫を守ろうかと考えていた。おそらく、これは自分の視点でしか見れていなかった筆者が、アニーの視点になりきって質問に回答しようとする中で、自分の視点はあくまで自分の視点であり、アニーの視点からは別の見え方をしているのだと気づいた。3つの視点でいう第1の視点、「ミクロな視点で見えているものを理解する」ことが出来た瞬間だったのだろうなと振り返って思う。



インタビュー場所。学生の間座るアニー

次に他の猫にインタビューしようと、今度はお弁当屋さんの裏を縄張りになっているグリの元へ行った。ここはベンチはないので、地べたにパソコンを広げ寝っころがってインタビューをした。人通りも多く落ち着かない場所だ。

筆者「久しぶり。ちょっとやせた？顔つきが疲れて見えるけど、大丈夫？ここは人通りが多くてうるさいね。」

グリ（トレーの荷台の下に潜り込む）

筆者「あ、そっち行くの？ここは煩くて集中できないなあ。あ、モノが多くてごちゃごちゃしてるけど、グリにとっては隠れ場所が沢山あるんだね。なるほどね。換気扇の上は温かいしね。人通りが多いから、人目を気にして猫好きが近寄ってくるのも少ないのかな？さっきアニーが猫嫌いで近寄ってこない人よりうっとうしい猫好きが嫌だって言ってた。そう考えると、ここは良い環境だね。人目が多いから危害を加えるほどの猫嫌いも、度のすぎた猫好きも長居しない。なるほどねー。」

地べたに寝っ転がって低い猫目線になったことで、うるさくて落ち着かないと思っていた弁当屋の裏のグリの空間と、ベンチがあって、開けていて落ち着く環境だと思っていたアニーが居る空間との価値観が逆転した瞬間だった。人目線で落ち着く空間が猫目線でも落ち着く空間だとは限らないと気づいた。これは、アニーとのインタビューによって、ミクロな視点で見えているものを理解した後に、「物の配置」と「猫」と「人」の存在を客観的に捉え直したことによって、3つの視点で言う第2の視点「メゾな視点で全体図を捉える」ことができたことによって得た気づきだと思う。

猫インタビューが面白くて、その後も修論に詰まると猫に相談しに行くようになった。それが、今回の連載のタイトル「そうだ、猫にきいてみよう」に繋がっています（笑）

4. 活動における葛藤

本当にその行為は、猫や人のためになるのか、負のパターナリズムに陥らないように、行動を決定する作業は大きな葛藤（Conflict）を伴う。ここに、活動の中で生じた葛藤と、その両者の意見を反対意見と賛成意見に分けたものを紹介したい。タイトル部分が RitsCat 決定である。



インタビューに協力してくれたグリ

Table1.大学猫活動における葛藤

タイトル	反対意見	賛成意見
Conflict.1 不妊去勢手術を実施する	1)野生動物に手を加えるべきではない。 2)手を加えるのであれば責任が伴う。そんな責任負えないだろう。 3)可哀想。人間不信になってしまう。子孫をも残すことが最も重要な本能ではないのか。	1)猫は野生動物ではない。殺されるよりはまし。共存を目指したい。 2)手術だけで終わらず世話をする覚悟はできている。100頭の子猫を殺処分するより25頭の母猫を手術する方がまだ可哀想ではない。 3)なつかせることが目的ではない。
Conflict.2 全頭不妊去勢手術をする	1)可哀想だから手を加えるのは最低限にとどめるべきでは？ 2)金銭的に全頭は厳しい。 3)ノラ猫が絶滅してしまう。	1)オスの去勢手術によって迷惑行動の抑制になる。オスのみ残すことによりメスを求めた徘徊や喧嘩が増してしまい逆効果。長期スパンで見ればここで全頭することが最小限につながる。また、数頭だけ手術していないメスがいたら、そのメスにオスが集中しボロボロになってしまう方が可哀想ではないか？ 2)寄付や部員を増やすなど努力をするべきである。 3)ノラ猫という種はなく、ゆるやかにであってもゼロにする取り組みである。
Conflict.3 手術の際に妊娠が発覚した場合、堕胎させる	1)命を大切にすることが第一。出産前でも命。 2)子猫は里親に出せる。	1)減らすことが第一。生まれる前で線を引き割り切るしかない。 2)母子の面倒をみれない。里親さがせない。学生では保護することができない。
Conflict.4 置き餌はしない	1)定時にこれなかった猫が可愛そう。 2)30分から1時間も待てない。 3)強い猫しか食べれない。	1)猫も賢いから時間を覚える。 2)置き餌には虫が湧くしカラスが食べてしまう。衛生的に良くない。捕獲のために餌の時間を管理する必要がある。 3)エサ皿を複数用意すれば力関係に関係なくあげることができる。
Conflict.5 毎日餌やりをする	1)肉食動物だから胃を休める日があった方が猫の健康管理にいい。 2)狩るの練習も必要。 3)休日も学校に来るのは負担だ。	1)飼い猫は毎日あげる、人の都合のいい言い訳でしかない。 2)人が世話を放棄しない限り狩りは必要ない。 3)手を加えている責任がある。休日もやるべきだ。
Conflict.6 子猫に離乳食を与えたり治療をする	1)子猫は自然淘汰に任せるべき。動物愛護団体じゃない、動物福祉団体だ。 2)離乳食をあげずに育ってきた猫がいるから大丈夫。	1)大学に猫が生きていける自然はない。大学の猫の世話をする団体だと言っている以上、子猫であれ大学の猫ははず。人の都合のいいように理由を付けて助けられる命を見捨てることは動物福祉ではなく愛護だ。出来ない理由を並べ立てるのではなく、どうやったら出来るのか考えるべき。 2)キャットフードで生きて2、3代目の猫は狩り能力も弱っているはず。親がネズミを食べているならまだしも、ドライフードしか食べていないんだから、自分たちがあげなければ死んでしまう。現に1匹手遅れになってしまった。
Conflict.7 子猫を里親に出す	1)里親を信用できない。へんな人に渡してしまった辛い失敗があった。 2)保護しておく場所がない。そこまで学生ではできない。 3)大学の方が新しい環境より幸せ。猫の幸せの定義が分からない。親兄弟と引き離す時つらい。 4)保護中に死んでしまった時、辛い。長生きすることがいいことなのか？	1)きちんとした手順を踏んで、誓約書・譲渡証を渡せば大丈夫。 2)協力者が保護と里親探しをやってくれるから手伝えいい。 3)子猫はまだ大学環境に慣れていないから大丈夫。自分の家があった方が幸せ。猫の幸せの定義は分からないが、ノラ猫でボロボロだったりおびえている状態よりも、家庭でお腹出してゴロゴロ寝ている方が幸せそうに見える。親兄弟を分離することはとてもつらい。 4)ノラ猫は3年～5年の寿命だが飼い猫は15年以上生きる。ノラ猫を減らしたい。子猫は猫嫌いなことでは物凄く嫌なものであり、成果が出ていないように見えてしまう。そんな簡単に成果がでるものではないけれど・・・。

前のページで紹介したような様々な葛藤を話しあいながら、活動内容の精緻化の仕上げとして、2014年3月に決定したサークルの根幹である活動理念・活動目的・活動方針を載せ、3つの視点から簡単に考察を加えたい。



左から、ガジュ、マル、アニー

右が RitsCat の活動理念・活動目的・活動方針である。

活動理念および活動目的どちらも「共生」ではなく「共存」を掲げている。また、活動目的 i において「人と猫が共存できる大学環境を確立し、維持する。」と、「猫好き」と「猫」という二者関係の共生ではなく、猫が苦手な人も含め、「大学環境」をマネジメントしようとする視点が伺える。一方、活動理念においては視点が社会に向いており、活動の社会的意義の認知が伺える。他方で、実際の活動としては「ii 原則として、本団体は立命館大学衣笠キャンパス外の猫に関して、直接は手を出さない。」と自分たちのキャパシティに配慮している視点も見受けられる。

“どの猫までを対象とするのか”というミクロな目線と“大学環境をマネジメントする”というメゾ視点、そして“社会に発信する”というマクロな視点をもつ活動理念及び活動目的であると言えるだろう。

あとは、会員が100人を超えた今、どれだけのメンバーがこの理念や目的を覚えているのか、作ったメンバーの想いをどれだけ伝承することができるのかが次なる課題だろう・・・。

(其の一)活動理念

「人と猫が共存できる社会の実現を目指す」

(其の二)活動目的

- i、人と猫が共存できる大学環境を確立し、維持する。
- ii、立命館大学衣笠キャンパス内に住む猫を「大学猫」として管理し、一代限りの生を全うしてもらおう。
- iii、本団体の掲げる理念の実現の為、本団体の活動及び全国の動物行政と地域猫活動の現状を大学内外に周知させる。

(其の三)活動方針

- i、あらゆる問題に対して、初めから諦めないで、その都度試行錯誤して、自分たちに出来ることを実行する。
- ii、原則として、本団体は立命館大学衣笠キャンパス外の猫に関して、直接は手を出さない。
- iii、「妊娠の疑いがあるメス猫でも手術を行い、仮にそのメス猫が妊娠をしていた場合は子猫ごと子宮を摘出する」ということに同意する。
- iv、大学猫の傷病1回につき、本団体が経費として治療費に充てる事が出来る上限額を3万円までと定める。
※治療費が3万円を超える場合の対処については、その時の具体的な判断材料をもとに当事者となるメンバーで話し合う。
- v、わからないこと・困ったことがあれば、補助会員・大学職員・動物病院といった協力者の方々へ相談することも忘れずに。
- vi、全ての協力者の方々への感謝の気持ちを忘れない。

負のパターナリズムを最小限に抑えた活動は、別の立場や価値観を持つ人からも受け入れられるWin-Win な取り組みとしてコミュニティで機能する。RitsCat が餌やりを行う際には、大学から支給された腕章を付け、大学公認として餌やりをしている。



餌やり時の腕章

大学が猫の餌やりを公認するなんて・・・と驚く方も多いだろう。しかし、よくよく考えると、RitsCat のような特定のサークルに餌やりを許可することは、動物愛護とは切り離しても、大学にとってメリットは非常に多いことが、前回連載から読んでくださっている方は分かっているのではないだろうか。よく、「どうして立命館大学は、猫の餌やりを認めたんですか？」と聞かれることがあるので、動物愛護目線を一旦無しにして、大学目線で餌やりを公認するメリットについて返信したものを載せたい。



体系の性格も丸くなったガジュ

サークルの餌やりを大学が公認する理由は主にキャンパス衛生の観点から3点です。

1. 新参者をいち早く見つけ、TNR を行うため。

継続的にキャンパス衛生を管理していくうえで、猫の管理は重要です。新参者をいち早く見つけ、捕獲し、手術を行うことが必要です。そのためには、毎日の餌やりを決まった時間に決まった場所で行うことで、猫の個体管理が行うことができ新参者に気づくことができます。

さらに捕獲にあたって、ある程度の餌付けがされていない猫をピンポイントで捕獲することは非常に困難であり、捕獲をスムーズに行うためにもルール化された餌やりは有効です。

2. 置き餌、まき餌の禁止

不特定多数の人が不特定多数の場所で餌をまき、清掃を行わないこと、いわゆる猫の餌の“置き餌”が非常に不衛生であり解決すべき課題です。その対策として、立命館では猫サークルに大学の腕章を発行し、腕章を着用していない学生および教職員の餌やりを禁止しています。学生サークルが毎日決まった時間に餌やり（置き餌ではなく片づけまで）を行う代わりに、一般学生や教職員の餌やりを禁止する張り紙等啓発活動を大学事務局に代わってサークルが行います。猫の排他的ではなく共生的な視点からの餌やり禁止看板は理解されやすく効果があります。また、学生が餌やり時に猫の糞尿の清掃を行っています。

3. キャンパス衛生を守る人員確保

①②の観点から猫サークルは大学側から見ると、キャンパス衛生を守る団体と捉えることができます。その活動を継続してもらうには人員確保は不可欠であり、ただ、猫の頭数を把握し、新参者を捕まえ手術するサークルでは人は集まりません。餌やりは学生のモチベーション維持に非常に重要なポイントです。

全部ではありませんが、近年急速に広まっている取り組みであるという説明に使っていただけるよう、思い出せる範囲の先行事例を紹介します。それぞれ、大学名とサークル名で検索していただければブログなり Twitter など出てくると思いますので、正解な情報は再度ご確認ください。

岩手大学：いのちのサークルねこの手

東北大学：とんねこ

千葉大学：ちばねこ

筑波大学：HS CaT

横浜国立大学：ネコサークル

早稲田大学：わせねこ

慶應義塾大学：ひよねこ

埼玉大学：埼玉大学さくらねこサークル

新潟大学：にいがたカレッジキヤット

静岡大学：はまねこ. com

中部大学：中部大学猫サークル

名古屋大学：なごねこ

岐阜大学：岐阜大学ねこサークル

大阪府立大学：ひと☆ねこサークル

同志社大学：DoCat

立命館大学：RitsCat

京都大学：ねこサークル Cat-Ch

三重大学：みえねこ

長崎大学：にゃんかつ

九州大学：ねこ部



出逢えたら恋の予感？ハートを持つマリン

5. まとめ

前回の連載から、猫流の「問題の本質の捉え方」と題して、自由に書かせてもらってきました。

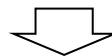
☆問題の本質を立体的に捉えるポイント☆

- ① 悪者探しをしない
- ② 3つの視点で捉える
 - ・ミクロな視点で見えているものを理解する
 - ・メゾな視点で全体図を捉える
 - ・マクロな視点で、社会システムの中で捉えなおす
- ③ 背後ストーリーを理解する

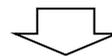
その中でも今回は、「②3つの視点で捉える」ことにより、問題を解決しようとする取り組みがどのように変化していくのかに焦点を当てました。問題への対策が今ひとつな場合は、改善しようとしている問題の本質を掴みきれていないケースが多いのではないかと思います。よくよく考えているのに、改善点が思いつかないのは、視点が固定されてしまっていることが大きな原因だと猫が教えてくれました。

3つの視点で考える流れ

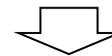
①様々な価値観を持つ人々のミクロな視点を理解し捉えることによって、“問題”を多角的に見る。



②メゾな視点で“問題”と環境、人々を俯瞰的に捉え、問題発生しているシステムに合った“対策”が考える



③マクロな視点に立ち、社会システム中で捉え直すことによって、対策を再評価する。



①②ミクロな視点 or マクロな視点に戻る

今回の立命館のケースでは、ミクロ⇒メゾ⇒マ

クロと、視点が広がっていく事例でしたが、ミクロ⇒マクロ⇒メゾ、あるいは、マクロ⇒メゾ⇒ミクロという順番のように、社会問題の認知から入るケースもあります。どちらにせよ、3つの視点を行ったり来たりしながら、繰り返し考えていくことで、“問題”を多角的にみることに繋がり、3つの視点が重なる点、つまり問題の本質が見えてきます。

以上が、筆者が猫と向き合う中で、学んだ問題や葛藤との向き合い方、「3つの視点で捉える」でした。とてもとても長くなってしまいましたが、最後まで読んでくださってありがとうございました！

今回、予想以上に長くなってしまったので、活動を通じた学生の心理的变化や、大学猫活動の教育的意義については、次回に回したいと思います。なので、今回は、猫流の問題の捉えかた「③背後ストーリーを理解する」の前に、「共生」と「共存」についてや、「共感」の再考といった心理的な部分について、エピソードを紹介しながら書かせていただきたいと思います。

参考文献

加藤謙介 (2005) . 「地域猫」活動における「対話」の構築過程 ボランティア研究
 加藤謙介 (2014) . 「地域猫」活動の長期的変遷に関する予備的考察 —横浜市磯子区の実践グループ年次活動報告書に対する内容分析より— 九州保健福祉大学研究紀要
 環境省 (2015) . 「平成 25 年 犬・猫の引取り及び負傷動物等の収容状況」
 (http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/dog-cat.html、2015年1月10日)

小池英梨子.....
 2015年立命館大学応用人間科学研究科修了
 現在は、公益財団法人どうぶつ基金に所属。

～RitsCat の紹介～

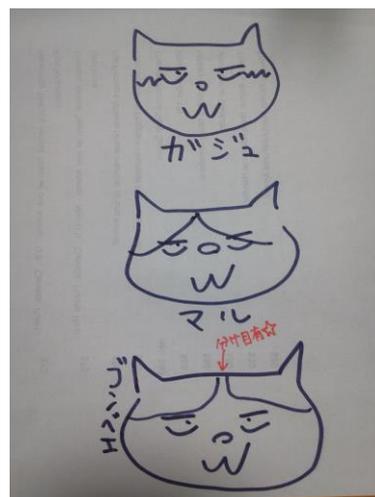
HP <http://ritscat.jimdo.com/>

Facebook <https://www.facebook.com/Ritscat>

紙面が余ったので、おまけ



不妊去勢手術したての頃。栄養状態が悪くガリガリ。今では少し肥満疑惑。右から、ガジュ、マル、ゴンベエ。ゴンベエは後にメスだということが発覚する。



ガジュマルゴンベエの見分け方は、「分け目」。